

# ロマン・キムと主体性の問題：探偵小説・精神分析・偶有性

坂 中 紀 夫

## はじめに

1952年12月初旬、日本文学研究でもあったアルカージ・ストルガツキーは弟ボリスへの手紙で、「それから、ロマン・キムの『スンチョンで見つけた手帖』は必読だよ。あれは傑作だ！いまだと単行本で出ているから」と書き送っている。<sup>1</sup>

ロマン・キム（1899-1967）とは、名前からも分かるように朝鮮系ロシア人の東洋学者で、第二次大戦後は「ソヴィエト政治・探偵小説の草分けの一人」<sup>2</sup> となった作家である。ここで言及されているのは、1951年に『ノーヴィ・ミール』誌に掲載され、同じ年に書籍化されたその彼の小説であるが、ストルガツキーはなぜこれを絶賛したのか。理由の一つはその内容にある。1945年8月14日深夜、玉音放送の阻止に失敗した一人の将校が、自決した仲間の参謀に続こうとするも、いつの間にか決心を翻し、別人格として生きていく。その後、主人公は過去の特務機関での経験を買われ、今度は米軍の協力者となり、最終的には朝鮮戦争に従軍する。以上のストーリーを軸に、この作品では当時の日米の政治的内幕にも話が及ぶのだが、有馬哲夫によれば、それらはアメリカ国立第二公文書館が2005年に公開した資料に照らし合わせるができるのだそうだ。<sup>3</sup> つまり、二十一世紀になって漸くアクセスが可能となった事柄に、この作品は触れていたのである。日本研究との関連性を考えれば、ストルガツキーがこれを高く評価したのも頷けるだろう。しかし、専ら研究という文脈でこの小説に注目したのなら、弟にも読むよう勧める必要はなかったはずだ。つまり、彼は文学的な観点からも、キムのこの初期作品を絶賛したのである。実に、この作家はその後、「探偵小説というジャンルが高級な散文となって」おり、「恐らく、ロシア語で書かれた最良の探偵小説である」<sup>4</sup> といった評価を受けることになる。

<sup>1</sup> Бондаренко С.П., Курильский В.М. (сост.) Неизвестные Стругацкие. Письма. Рабочие дневники. 1942-1962 гг. М., 2009. С. 160.

<sup>2</sup> Сорокина М.С. Жизнь, похожая на коробку спичек // Природа. 2006. № 4. С. 92.

<sup>3</sup> 有馬哲夫『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』新潮新書, 2010年, 10頁。

<sup>4</sup> Сафонов В. Альпийские луга // Ким Р.Н. Тайна ультиматума: повести и рассказы. М., 1969. С. 317.

ところで、キムに対する関心が近年、高まりを見せている。しかしながら、それは小説家としての再評価ではない。先ほど、キムが、第二次世界大戦の機密情報を把握していたと書いたが、この大衆作家に意外な過去があったことが最近になって判明したのだ。その発端となったのが、オレグ・モゾーヒンが第二次大戦までのソ連の対日諜報・防諜史を、アーカイヴ資料をもとにまとめた研究に含まれていた次の記述である。

1937年5月21日、ソ連邦・内務人民委員部はロマン・ニコラエヴィッチ・キムの逮捕をスターリンに報告した。取調べの過程で判明したのは、ウラジオストクの日本総領事であり、参謀本部の現地諜報の指導役である渡邊〔理恵〕が、1922年に彼を徴募し、その指示の下、スパイとして合同国家政治保安部・内務人民委員部に潜入させていたということだった。

キムの本当の名前はモトノ・キングである。キムは、日本の外交官であり、第一次大戦時にロシア大使を務めた後、山本内閣で外務大臣となる本野一郎の婚外子だった。本野一郎は1928年に亡くなる。<sup>5</sup>

本野一郎の外相就任は寺内内閣のときで、没年も1918年と正確さを欠くものの、朝鮮系の推理作家だったはずの人物が、スターリン時代に逮捕された際の供述として、自分は日本人スパイで、しかもロシアとも関りのあった大物政治家の私生児だと語っていたのだ。

予め最新の研究に即して言うておくと、彼が内務人民委員部の職員だったことは事実だが、この証言は高い確率で虚偽である。しかしながら、2013年初頭に公表されたこの供述内容は、その信憑性はもとより、ロマン・キムという存在の伝記的事実についての再考を促すものとなった。その素早い対応として2014年に刊行されたのが、アレクサンドル・クラノフの『昇る太陽の蔭に』と『スパイの東京』である。<sup>6</sup> いずれの著書も、ロシア人諜報員の未発表資料やアーカイヴ資料を丁寧に精査し、彼らの伝記的事実をまとめようとするもので、キムにも多くの頁が割かれている。それらは「忘却の淵からロシア人諜報員を復権させる」<sup>7</sup> ものであり、先に触れたキムの供述の謎に対しても暫定的な見解が示されている。すなわち、逮捕された他の多くの東洋学者と同様に銃殺されてしまわないための放言・賭けだった可能性を。<sup>8</sup>

<sup>5</sup> Мозохин, О.Б. Противоборство. Спецслужбы СССР и Японии (1918 - 1945). М., 2012. С. 333, 334.

<sup>6</sup> Куланов А.Е. В тени восходящего солнца. М., 2014.; Он же, Шпионский Токио. М., 2014.

<sup>7</sup> 服部玲「海外出版レポート・ロシア：地方出版社の現状と書店の閉鎖」『出版ニュース』第2378号（2015-05），2015年，27頁。

<sup>8</sup> Куланов. В тени. С. 208.

2015 年に刊行されたイワン・プロスヴェートフの『シュティルリッツの代父』は、アーカイヴ資料へのアクセスの制限が大幅に解かれ、「著者自身がロシア連邦保安局中央文書館の幹部から閲覧を許された [...] 重要な文書類などを活用した点に、新味がある」。<sup>9</sup> キムの不可解な供述についての、ここでの回答は以下のようなものだ。キムは東洋学者として 1920 年代から論文や翻訳を発表していたが、逮捕の前年に保安機関の上司から実名での執筆を禁止されていた。そこで彼は、「キム・サオリ」というペンネームを用意する。

「サオリ」とは彼の出自に強く関連する「ソウル」を仄めかしたものだが、これが取調官の知るところとなってしまう。「日本のスパイ」として逮捕された、つまり「日本人」でなくてはならないお前の本名は何なのかと。「必要だったのは、彼が朝鮮人ではなく日本人である [...] との自供だったのだ」。そこでキムは、ルビヤンカ内部監獄の図書室を利用し、日露関係史を調べ上げ、あり得たかもしれない自分の父親として、かつてロシア公使一等書記官だった本野一郎の名前を挙げ、「モトノ・キング」なる「本名」を創作した。ペンネームで用いるつもりだった女性的な名前「サオリ」については、「母」の名前だったと説明している。<sup>10</sup>

プロスヴェートフの著書が優れているのは、キムの文学にも一定の言及がなされている点である。<sup>11</sup> キムの「過去」が衝撃的だったのには、彼の作家としての知名度が前提としてあった以上、これは妥当な選択であろう。しかしながら、執筆時の作家の暮らしぶり（外国旅行や結婚など）を知ることができるものの、肝心の作品自体については内容の概略的な紹介を超えるものではない。この課題に部分的に応えているのが、2016 年に出版されたクラノフによる総合的な評伝『ロマン・キム』である。<sup>12</sup> ここでクラノフは、キムに強く関与した 20 世紀の世界史的な流れに注意深く目を向けながら（ロシア／ソ連、日韓併合・極東ロシアの朝鮮系移民・抗日運動、大日本帝国／日本）、そうした状況におかれた作家の体験が作品に大きな影を落としていることを、丁寧な読解により明らかにしている。

例えば、第二次大戦のイタリア戦線を舞台にした中編小説「枕の下のコブラ」の冒頭は、チャーチル暗殺を計画した容疑者が拷問を受ける場面から始まるのだが、これは作者自身が逮捕されたときの体験に基づいている。また、検閲で変更を余儀なくされたものの、当初のプロットでは、暗殺の対象はスターリンだった。この設定にはスターリニズムの犠牲

<sup>9</sup> 服部玲「海外出版レポート・ロシア：『文学年』のモスクワ・ブックフェア」『出版ニュース』第 2392 号（2015-10）、2015 年、25 頁。

<sup>10</sup> Просветов И.В. «Крестный отец» Штирлица. М., 2015. С. 134-135.

<sup>11</sup> Там же. С. 187-202.

<sup>12</sup> Куланов А.Е. Роман Ким. М., 2016.

者としての作者の否定的な感情が潜在している。<sup>13</sup>「読後焼却のこと」や「幽霊たちの学校」といった中編小説では、日本研究者や作家を目指す主人公が、諜報員やスパイ見習いへと転身するのだが、これはキム自身の経歴、つまり東洋学者・文学者が秘密警察での仕事に専念せざるを得なくなる状況と正確に重なっている。つまり、登場人物たちは作者の「文学上のオルター・エゴ」だったのである。<sup>14</sup>

## 1. 事後性

クラノーフの最新の著作は、キムの伝記的事実を現時点で可能な限り掘り下げたものだが、それでもこの作家の人生には多くの不明な点が残されている。例えば、彼は少年時代を日本で過ごし、その際に、本人の話によれば、杉浦重剛の世話になっていたという。しかし、朝鮮系の少年キムとこの国粹主義者とを結ぶ客観的な証拠は、いまのところ確認されていない。さらには、1913年から17年までは空白期間であり、どこで何をしていたのかは何一つ断言できない。諜報員時代はもとより戦後でさえも、推察するしかないことが多いのだ。クラノーフはキムの生涯にわたるこうした曖昧さの問題に何か意図的なものを読み取り、「結局、ロマン・キムは本物の忍者だったとの考えを受け入れることで、初めて意味が分かってくるようなことがあるのだ。内務人民委員部の尋問官が究明できないような履歴がいつか必要になることをあたかも予見していたかのように、数年間に渡って調査用紙で自分の個人情報を誤魔化していたことを、それ以外にどう説明するというのか（[事実に反して] 自分にいるのは息子ではなく、娘だと書いていたほどなのだ）」と述べている。<sup>15</sup> 忍者は正体がばれてはいけない。同じように、「キムは～である」と同定しようとする他者は、煙に巻かなければならない、その準備を怠っていなかったというのだ。キムと交際のあった同時代人の言葉を、ここで引いておこう。湯浅芳子は彼について「ちょっとうさんくさいところがあった」と言い、岡田嘉子はこれを好意的に受け取ったのだろうか、「なかなかのダンディで、ダンスがうまく、機智に富み、座談に巧み」と語っている。<sup>16</sup> いずれも捉えどころのなさについての証言だとは見做せないだろうか。

<sup>13</sup> 服役中にキムは息子を肺病で亡くす。「人民の敵の息子」として冷遇されたことがその健康に影響したとも言われ、一説ではこの死が当時の妻との別離の原因となった（Там же. С. 322.）。

<sup>14</sup> Там же. С. 305, 308, 315, 320.

<sup>15</sup> Там же. С. 9.

<sup>16</sup> 木村浩「〈ある作家の肖像〉ソ連の推理作家ロマン・キムの謎の部分：三つの祖国を持ち歴史に翻弄された男の一生」『文藝春秋』1984年1月号、322頁。岡田壽子『心に残る人びと』早川書房、1983年、211頁。

ところで、キムの探偵小説は作者の特異な体験の反映であり、その登場人物と作者の間には一定の同一性を認められるのだった。であれば、作品の構造やテーマの解読は、この曖昧さの問題を解く手掛かりとなるだろう。しかし、そもそもなぜ探偵小説だったのだろうか。というのも、真相の一義的な解決を基本方針とする探偵小説ほど「曖昧さ」を嫌うジャンルはないからだ。

この問題について考えるために、ここで唐突ではあるが精神分析に目を向けてみたい。後述するように、その理解は通俗的ではあるが、キムもしばしば作中でフロイトの理論を引き合いに出すからだ。「無意識」や「死の欲動」といった概念が、探偵小説の中で話題になるのである。ところで、探偵小説と精神分析にはある種の形式的な同型性が指摘される。両者に共通する「事後性」の特殊な働きに目を向けると、それを理解しやすい。

フロイトの有名な患者「狼男」の回想録に次のような一節がある。

あるとき、たまたまコナン・ドイルと彼の生み出した人物、シャーロック・ホームズの話になったことがあった。私は、フロイトはこのタイプの軽い読み物は嫌いだと思っていたが、驚いたことにそれがまったく見当はずれで、彼はこの作家の作品をすでに注意深く読んでいた。幼児期を再構成する際に、精神分析では状況証拠が役に立つという事実から、フロイトのこのタイプの文学への興味は説明できるかもしれない。<sup>17</sup>

「狼男」はこれに続き、ホームズの推理の特徴として、「完璧な理論家」であるポーが創造したデュパンの理論に基づく演繹の方法をあげている。<sup>18</sup> つまり、何らかの仮説（仮の真理・事後的な視点）を設定した上で、そこから諸事象を意味づける推理法である。これが精神分析における経験の事後的な「再構成」と類比的であるのだ。他ならぬ「狼男」の症例がそれを示すものとなっている。

「狼男」は一歳半の頃に外傷的出来事（原光景）を目撃し、四歳になる前から癩癪を見せるようになる。フロイトは成人後の彼を分析し、四歳ごろに見た「狼の夢」から症状の解釈を試みるのだが、ここで生じる素朴な疑問は、原因（外傷的経験）と結果（症状）との時間差である。これに関して想定される批判（はたして一歳児が「それ」を「原光景」として理解できるか）に対しフロイトは、因果性の遡行的な成立という主張をする。

<sup>17</sup> ミュリエル・ガーディナー編著（馬場謙一訳）『狼男による狼男：フロイトの「最も有名な症例」による回想』みすず書房、2014年、179頁。

<sup>18</sup> 同上、179-180頁。

私の意味するところは、彼がこの出来事を理解したのは夢を見た四歳時にであって、観察時のことではないということである。一歳半のときに彼が取り入れていた印象が、彼の成長・性的興奮・性的探究のおかげで、事後的に夢の時期には理解できるものとなっていたのである。<sup>19</sup>

意味を持たずに抑圧されていた原因の性的な含みを、「狼男」は成長と共に了解する。忘れられていた出来事の意味が、（類似する経験などをきっかけに）形容矛盾であるが初めて再発見されるわけだ。

一部の探偵に見られる演繹的推理（事実の積み重ねに基づく「足」を使った帰納的捜査とは区別される）に、フロイトも関心を寄せていたと「狼男」は推察する。しかし、このジャンルの「形式性」に気付けていれば、それはむしろ当然の帰結だったと言える。探偵小説においては、「あらかじめ客観的な構造（ストーリー）は作者＝犯人に与えられている。作者＝犯人は、それを作品＝被害者に対象化する。近代小説の場合、対象化の仕方がストーリーのプロット化として了解される」。<sup>20</sup> ここで、例えばワトスン並みの読者は、ホームズの探偵に追走し、結末で明かされる真相に衝撃を受けることになる。探偵に対し決定的に遅れていた読者は、結末でようやく「真理」の位置に立つことで、作中のそれまで気にも留めなかった重要な細部に気付かされるのである。作者自身や卓越した読者は別として、記述が「伏線」として指示され意義を持つのは、結末で探偵が述べる真相に相関してのことなのだ。つまり、意外性は、出来事を事後的に意味づける探偵の特別な役割を要としており、この役割こそ、精神分析のプロセスにおける分析家のそれと類比的なのである。すなわち、「知っていると思定される主体」として立ち現れ、「患者の無意識的欲望の絶対的確信 [...] を体現」しつつ、症状の意味を遡行的に跡付ける分析家の役割に。<sup>21</sup>

## 2. 円環構造

注目されるのは、キムもまたこの同型性に自覚的だったことだ。ブンナカンというタイ人の失踪事件を描いた中編小説「誰がブンナカンをさらったか？」（以下「ブンナカン」と表記）では、その行方を追う探偵役が次のように語る。

---

<sup>19</sup> ジクムント・フロイト（須藤訓君訳）「ある幼児期神経症の病歴より」『フロイト全集』第14巻、岩波書店、37頁。

<sup>20</sup> 笠井潔『探偵小説論序説』光文社、2002年、129頁。

<sup>21</sup> スラヴォイ・ジジエク（鈴木晶訳）『ラカンはこう読め』紀伊国屋書店、2008年、57頁。

「例えば、『ベイカー・ストリート・イレギュラーズ』というクラブがあって、著名な政治家、芸術家、学者、提督、大使や作家が加入している。皆、シャーロック・ホームズの崇拝者だよ。会合では、『ワトソンは女だった』とか『誰がホームズの密かな想い人か』なんて話が、これ以上ないくらい真剣に報告されるんだ。この名探偵物からの引用で、報告の主張を豊富に裏付けてね。このクラブは、状況や葛藤といったものを全て理論化し、生物社会学的な指標や心理的コンプレックスの問題に取り組んでいるフォルトンの研究所に似ていないか？ 科学で同じ遊びをしているのさ」<sup>22</sup>

ここに出てくるフォルトンとは、社会心理学を研究するフロイト主義者の登場人物のことである。つまり、この一節は、精神分析を援用する研究とシャーロキアンらの議論（それはホームズの私生活から犯罪の話題にも及ぶだろう）とが「同じ遊び」であると非難しているのだ。では、いかなる意味でそれらは「同じ」なのか。フロイトの第二局所論をイメージすれば分かりやすい。「ホームズ物語も、悪人（エス）が欲望を抱くのに対して、ホームズという超自我がそれを打ち砕く話、というふうに要約でき」るからだ。<sup>23</sup> しかし、キムはさらにそれが円環構造をとっていることに注意を促す。具体的に見てみよう。

この小説の粗筋は以下のようなものだ。プンナカンは、タイの元宮廷財務長官で、第二次大戦中の対日協力の責任追及を避けるため、アメリカに逃げ延びたとされる人物である。その彼が再び失踪する。事件を知った作家代理人とその秘書とが、担当する小説家にネタを提供するため、探偵役としてプンナカンの関係先を訪ね、彼の行方を探る。その合間の雑談で、フロイトの理論が話題に上る。

「フロイト主義者は、戦争は生物学的に規定されたもので、人間に生得的な破壊衝動がある以上、不可避であると宣言して正当化しています。戦争は有益でさえある、というのも心理的な緊張緩和になるからだってね。フロイト主義者は、階級闘争、民族解放運動、革命、政変が集団ヒステリー、集合的な神経症であることの証明に努めているのです」

「フロイト主義者は犯罪も正当化しているのだろうね」 [...]

「勿論。窃盗、詐欺、文書偽造、強盗、殺人、彼らの考えでは、こうしたことは全部、あらゆる人間に具わる性的エネルギーや本能的な破壊的攻撃性の昇華なのです」<sup>24</sup>

<sup>22</sup> *Kim P.H.* Кто украл Пуннакана? // *Kim P.H.* Школа призраков. Кто украл Пуннакана? Кобра под подушкой. Тетрадь, найденная в Сунчоне. М., 1971. С. 158-159.

<sup>23</sup> 小林司，東山あかね『シャーロック・ホームズの深層心理』晶文社，1985年，152頁。

<sup>24</sup> Там же. С. 189. 同様の見解は他の作品にも見られる。*Kim P.H.* Доктор Мурхэд и пациентка // *Kim.* Тайна ультиматума. С. 84, 86-88.

この会話における「生得的な破壊衝動」や「破壊的攻撃性」が含意しているのは、フロイトが1920年の論文「快原理の彼岸」で提示した「死の欲動」の概念である。この概念は元々、不快な体験の反復（戦争神経症患者が繰り返し見る悪夢、母の不在を「いないいないばあ」で追体験する幼児）という快原理に矛盾する行動を、合理的に説明するために出てきたものだ。すなわち、人間には対自・対他的に死を目指すような、「より以前の状態を再興しようとする、生命ある有機体に内属する衝動」があるのだと。<sup>25</sup>

しかしながら、犯罪や戦争に発展しうるこの衝動は、同時にその抑止力でもある。というのも、死の欲動の攻撃性が他者に向かわず自我に向いたとき、それは欲望や欲動を抑制する懲罰的な審級へと転化するからである。この審級は、個人に定位すれば「超自我」として、社会に定位すれば「文化」として立ち現れてくる。<sup>26</sup>

ここで典型的なミステリが、被害者の存在（始原的な暴力）を前提に、探偵の推理を経て、暴力を独占する国家・警察が犯人を逮捕する（暴力の始原への差し向け）構造からなっていることに注意しよう。攻撃性は、死の欲動をめぐる議論（破壊的欲動を、他ならぬその破壊的欲動が折り返してきて抑制する）と同様の円環構造を取っているのだ。精神分析と探偵小説とがある意味で「同じ遊び」であるとの断定は、以上のことを作者キムが理解していたことを意味する。そして、この断定を踏まえるなら、探偵小説であるこの作品においても、プンナカンに対する犯罪行為は、探偵や警察によって解決される結末が予想されてくる。

探偵役の代理人は、失踪者がかつて論文を寄稿したという「政治心理学研究所」のフォルトン教授のもとへ取材に行く。しかし、教授はプンナカンの行方について、「さあ分らんですな。彼がこちらに移ったことに腹を立てたオカルティストたちが、何かをしたのかもしれない」としか答えない。<sup>27</sup>

そこで、今度は代理人の秘書が、プンナカンが以前、関係していたというオカルト団体を訪ね、そのメンバーから、プンナカンとは「ケイティ・キング」と同じ現象なのだと教えられる。ケイティ・キングとは、1870年代にフローレンス・クックなどの実在の霊媒師が呼び出した霊体であり、真偽の程は別として、同時代人の証言や写真も残っている。プンナカンも、オカルト団体に所属していたカラフォチアスなるギリシャ人が霊媒となり、

<sup>25</sup> ジクムント・フロイト（須藤訓任訳）「快原理の彼岸」『フロイト全集 17』岩波書店、2006年、61-62, 66, 90頁。

<sup>26</sup> ジクムント・フロイト（嶺秀樹・高田珠樹訳）「文化の中の居心地の悪さ」『フロイト全集 20』岩波書店、2011年、136頁。

<sup>27</sup> *Kim. Кто украл Пуннакана? С. 135.*



「ケイティ・キングのように実体化し、この街に住み着くようになった」のだ。このメンバーはさらに、財務長官だったほどの知識を買われて研究所に招かれたこの人物の失踪について、「ブンナカンが捕まえられて殺されたのです。そしてそれができたのはフォルトン教授だけです。宮廷財務長官に〔研究不正を〕知られてしまったものだから…」との憶測を述べる。<sup>28</sup>

オカルト団体が憑依と関連付けられていることに注目するなら、人格の解離の問題を扱うという点で、こちらも（俗流）心理学の団体と見做すことができるだろう。さらに注目されるのは、失踪した当のブンナカン自身も精神分析の人であったことだ。彼がかつて寄稿したという論文は、無意識的なものを浮上させる自由連想法を文学研究に援用したものなのだ。次の一節は研究所の教授によるその方法論の説明である。

「[...] ブンナカンがある論文で提案していたのは、統計学的・数学的方法をソヴィエト詩人の作品論に援用することだったのです。彼は、あらゆる形容辞、言い回し、押韻、母音韻、比喩表現、政治的金言、個人的悪口、婉曲語法、イソップ的表現、卑語その他諸々を集計するよう勧めていました。そしてその集計を基に、あれこれの作家の隠された本質、彼の無意識の深層心理を解明することを」。

この説明によれば、これらの言辞は無意識的な性衝動や攻撃欲動に由来しており、従って研究所としてはその分析をさらに規模を広げて行い、「平均的なロシア人の仮説的イメージ」を得ることで、ソ連に対してより効果的にプロパガンダを仕掛けられるようになるのだという。<sup>29</sup>

自由連想について簡単に確認しておくと、それは「心に浮かぶすべての思考を無差別にいいあらわすことにより成立する方法」であり、そうすることによって「思考の意識的選択の排除」を達成し「一定の無意識の秩序を明らかにする」試みである。<sup>30</sup> ブンナカンの方法は、明らかにこの理論からの影響を受けている。通常の読解であれば、作品の顕在化しやすい意味（ストーリーなど）に注意が削がれてしまい、それ以外の情報の多くは捨象されてしまう。しかしそれを、統計学的・数学的方法により補うことで、作者の無意識を剔出しようというのだから。

<sup>28</sup> Там же. С. 144, 153.

<sup>29</sup> Там же. С. 134.

<sup>30</sup> J・ラプラシユ, J・B・ボンタリス（村上仁監訳・新井清他訳）『精神分析用語辞典』みすず書房, 1977年, 218-220頁。

以上のように、この作品は形式においても（「同じ遊び」：探偵小説＝精神分析）、内容においても（心理学研究所・オカルト団体・プンナカン自身）精神医学的言説に強く関連付けられている。その意味で、この事件の結末は、作者の精神分析に対する理解を示すものとなるだろう。事件（暴力性）の鮮やかな解決は、その理論的図式を模倣・支持することであり、プンナカンを純粋な被害者として描くことは、その方法論を救われるべきものの位置に据えることと同等である。

しかし、キムはそのような結末を選ばなかった。物語の終わり近く、プンナカンの謎は唐突に解決される。探偵役とは全く独自にこの事件を追いかけていた警察の専任捜査官が、ギリシャ人カラフォチアスが金儲けのためにタイ人に変装していただけだったことを突き止めるのだ。刑事はこう語る。「誘拐や殺人など一切なかった、どこかに逃げ去った抜け目ないペテン師が動いていただけだったのだ。終わり良ければ総て良し」と。<sup>31</sup> 謎はそもそも存在しておらず、被害者・精神分析の人プンナカンはただの詐欺師だった。つまり、キムはここで探偵小説と精神分析の成立にとって規定的である「娯楽としての殺人」や「無意識」「死の欲動」といった概念を冷笑的に批判しているのである。

真理が帰属する探偵、無意識を体現する分析家などいなくてもよかったという「探偵＝分析家」の役割の転倒は、この作品以外でも試みられている。同じくアメリカを舞台にした短編小説「天使の検査」では、仕事への不満を原因とした自殺に関するテレビ番組で、職業選択のミスは「良くて神経症やアルコール依存、悪くすると地下鉄のレールや高層ビルの窓」へと人を押しやることになりかねないとの心理学者のコメントに不安を覚えた人々が、適性検査専門のクリニックに押し寄せる。ここでは普通の心理テスト以外に、患者の身体的・認知的データが計測され、そこから抽出された「無意識的なもの」をもとに、職業適性が調べられるのだ。精神分析家と比べて幾分「客観的・科学的」ではあるものの、その方法が依拠する思想は似ている。クリニックの所長はこう語る。

「お客様の身体に様々な負荷がかかる条件で、視覚、聴覚、嗅覚の限界を正確に見定めることで、それ〔職業適性〕を解明することができます」。

「刺激に対する精神運動的神経衝動を調べ、そして特に人体の〔脳・神経・感覚器官などの〕分析器官の相互干渉を調べるに当たって、クロンバックとメール〔英米の心理学者〕の基礎的方法を用います。我々は、連想記憶、状況順応速度といった能力を明らかにし、外受容性の刺

---

<sup>31</sup> *Kim.. Кто украл Пуннакана? С. 195-196.*

激に対する反応時間を記録します」。<sup>32</sup>

これはパブロフらの生理学を想起させる台詞であるが、個人の守護天使を調べるとのタイトルからは、このような方法が唯物論的ではないとの批判的な考えを読み取ることができる。また、後述するように、神経症への対応を目指したこのような検査は結局、物語の終わりで冷笑されてしまうのである。従って、ここで想定されているのは、このロシア初のノーベル賞学者らの議論というよりも、精神分析の場に様々な計測装置が取り入れられた場合についてだと言えそうだ。

機械と精神分析の関係という文脈に限った上で参考になるのが、フリードリヒ・キットラーがフォノグラフ蓄音機と分析家の関係について述べていることである。「[...] フォノグラフの位置にフロイト自身が登場してくる [...]。椅子にかけている精神分析家が直面している問題はフォノグラフとまったく同じものだからであり、精神分析家は、自分の耳にいわば魔法をかけて、それをあらかじめ技術的な道具に変えておかなければ、他者の無意識がもたらす情報をふたたび抑圧したり、選別してしまったりしかねない」。見方を変えれば、これは情報機械が分析家の立場を奪いかねないことであり、だからこそ「患者たち自身には技術的な記憶手段をぜったい使用させないこと」が問題となった。<sup>33</sup> しかし、20 世紀の技術の発展と普及は、無意識的なものが文字や声以外からも抽出しうることを垣間見させた。例えば、映画が、それまでの視覚が意識的に捉えられなかった細部を示したように。さらにそれは、聴覚や視覚情報以外にも拡張されるだろう。東浩紀は「コミュニケーションの場は無数の分子の流れに貫通されており、それぞれの流れ＝情報を処理する無意識的＝分子的機械が並列的に、かつ異なったリズムで作動していると考えられる」と指摘している。哲学的な厳密さを犠牲にすることになるが、ここでの「分子的」という隠喩は、意識の背景で働く高速の情報処理のことだとして理解してよい。<sup>34</sup>

「天使の検査」はこうした問題に部分的に触れた作品である。身体的・認知的なデータを「自由連想」として拡張して計測することで、患者が本当に求めていたはずの職業を、つまりその無意識的な欲望を確定できると書いているのだから。

この検査においてはさらに、必要性が本当にあるのか疑いたくなるところなのだが、探

<sup>32</sup> *Ким Р.Н.* Проверка ангелов // *Ким. Тайна ультиматума*. С. 69, 71.

<sup>33</sup> フリードリヒ・キットラー（石光泰夫・石光輝子訳）『グラモフォン・フィルム・タイプライター』筑摩書房、1999 年、147, 151 頁。

<sup>34</sup> 東浩紀「精神分析の世紀、情報機械の世紀：ベンヤミンから『無意識機械』へ」『郵便的不安たち』朝日新聞社、1999 年、126-127 頁。

偵的な推論能力も試される。<sup>35</sup> ある高利貸しの他殺体を、その秘書が発見する。彼は赤色の窓越しに緑色の車が走り去って行ったと証言した。この状況の矛盾を指摘せよという課題である（赤色越しに緑色は見えない）。探偵の推理行為が、得られた情報から一義的な判断を導くことだと考えるなら、この課題は小説全体の寓話として読むことができる。つまり、諸データに基づく職業適性の判断も、手掛かりに基づく推理も同じだとキムは述べているのだ。

しかし重要なのは、この作品においても「分析家＝探偵」の役割が転倒されることである。検査を済ましたある二人組の男が、クリニックの所長から「極めて満足できるデータ」であり、「経営者も満足なさるでしょう」との診断結果を告げられる。彼らがホテルに戻ると、そこでは犯罪グループのボスが待っており、二人の報告に満足する。彼はその適性に応じて彼らを計画中の犯罪グループに配属し、最後に「科学は偉大なり！」と宣言するのだ。<sup>36</sup> 二人が実は悪人だったというこの設定は、その程度のことも見抜けず、さらには犯罪を助長することになるかもしれないという点で、「分析家＝探偵」の役割を虚仮にするものである。

### 3. 暗号と妄想

真珠湾攻撃を前にした日米の暗号戦を描いた中編小説「読後焼却のこと」は、精神分析と探偵小説を「妄想」という観点から批判する作品となっている。それを読者に予示するためか、このスパイ小説ではエピソードとして、ハムレットの台詞「私が狂うのは北北西の風のときだけだ」が引かれている。

物語の冒頭、海軍大尉のイデとテラノは新式の暗号機（97 式）をワシントンの日本大使館へと送り届けよとの特命を受ける。僅かでもミスを犯せば「直ちに自決」「切腹あるのみ」と言い含められた上で、<sup>37</sup> 彼らは客船でアメリカへ向かうのだが、その情報を事前に把握していた米軍の将校ホワイトとドナヒューによって機械の複製を作るための資料が盗み取られてしまう。

これ以降、日本の外務省系の通信は、アメリカ側に筒抜けの状態、本国と在外公館との間を行き来するようになり、ついに 1941 年 11 月 18 日付ワシントン大使宛ての「非常事態時のラジオによる特別連絡に関して」という重要事項までが、米軍の暗号班によって

---

<sup>35</sup> *Ким. Проверка ангелов. С. 76-78.*

<sup>36</sup> *Там же. С. 80.*

<sup>37</sup> *Ким Р.Н. По прочтении сжечь // Ким. Тайна ультиматума. С. 119.*

傍受されてしまう。解読されたその文章は次のようなものだった。

非常事態発生（我が国との外交関係の断絶の危機）ないし国家間関係の停止の場合には、最新ニュースの短波ラジオ放送に日本語で次のフレーズを組み込む。日米間の場合は「東の風，雨」，日ソ間の場合は「北の風，曇り」，日英間の場合は「西の風，晴れ」である。

この合図は短波ラジオで放送される天気予報の真ん中と終わりに伝えられる。フレーズは二度繰り返される。<sup>38</sup>

これは開戦相手国を本国から在外公館に天気予報で伝える，ということを意味している（暗号化・復号化の時間や手間が省ける）。それを知った米軍暗号班は，これ以降，日本の天気予報に特別な関心を向け，12月4日，ついに次のような文言を発見する。

東京地方，本日，北の風，次第に強まる，曇りの可能性。神奈川県地方，本日，北の風，曇り。千葉県地方，北の風，晴れのち曇り，波おだやか。<sup>39</sup>

ここでは、「北の風，曇り」が不正確ながらも二度繰り返されている。それを発見した米軍の暗号班は，日本の開戦国はソ連に違いないと息巻いて判断することになる。しかし，爆撃を受けたのは，真珠湾だった。

この不可解なメッセージとは別に，この作品にはもう一つ暗号が登場する。暗号機運搬の特命を果たしたイデは，次にハワイで諜報活動にあたっていた。しかし，真珠湾攻撃後に米兵に捕らえられ，尋問の際に所持していた「五桁の数字とQQQとの三文字」からなる暗号文を見つけられてしまう。米軍は「どうやら非常に重要な文書のように」と判断し，その意味を聞きだそうとするが，イデはそれに答えることなく，隙を見て投身自殺を遂げる。<sup>40</sup>

物語はこの二つの暗号の謎をめぐる展開し，戦後ようやくその意味が明らかになる。ドナヒューがテラノと再会し，事実を告げられるのである。

「あの［イデの］メモはこういうことでした。『陸地攻撃は、『古池や蛙飛び込む水の音』という合図がラジオで流されるまではない』と」

「それで？」

---

<sup>38</sup> Там же. С. 219

<sup>39</sup> Там же. С. 244.

<sup>40</sup> Там же. С. 282-284.

「それで全部です」

ドナヒューは冷笑した。

「どうしてそんな馬鹿げた紙切れのために死ななければならなかったんです？」

「彼は指令を果たせなかったんですよ」

「何の指令です？」

「メモの終わりに『Q』が三つありました。あれは『読後焼却のこと』という意味だったんです。ところが、なぜか彼はそれを果たさなかった。だから自決したんです」

さらにテラノは、もう一つの謎についても、あれは「合図などでは全くなく、外国向けに普段から東京で流している短波放送の最新ニュースの後の天気概況」だったことを明かす。<sup>41</sup>つまり、いずれのメッセージにも大した意味はなく、「北の風」に関しては、暗号でさえなかったのだ。ところで、これら二つの「謎」に関して、日本兵と米兵とはいずれも似たような対応を迫られていたことになる。イデは「馬鹿げた紙切れ」のために自決せねばならず、アメリカの暗号班はただの天気予報に大騒ぎさせられたのだから。つまり「読後焼却のこと」とは、重要な情報を隠蔽・抹消するためではなく、読むまでもない（読み返すまでもない）から燃やせということだったのだ。

しかし、イデの、ドナヒューから見た、狂信的な無駄死や、ホワイトらの徒労は何に起因したのだろうか。両者に共通しているのは、暗号＝顕在的でないものを扱っていることだ。イデは、「蛙飛び込む」が陸地攻撃の符丁であることを何としてでも隠さねばならず、ホワイトらはラジオ放送の膨大な文言から風向きと天気の特定の組み合わせを見つけ出さねばならなかった。「隠す／探す」と対照的ではあるものの、彼らはいずれも潜在的なもの、すなわち日本の無意識の欲望（どの国に宣戦布告するか）を巡って右往左往していたのである。記録されたラジオの天気予報は、いわば自由連想の集積であり、「蛙飛び込む」や「北の風」は、それを解析するためのキーワードだったのだ。だからこそイデはそれを隠蔽するために自殺せねばならず、ホワイトらはひたすらラジオの文言を解析せねばならなかった。しかし、実際のところは、別に死んだり解読に追われるたりする必要はなかったのだ。

このように、主要な登場人物たちは、どこか蒙昧に描かれるのだが、主人公のホワイトだけは最終的に例外的な扱いを受ける。戦後、学者として日本に暮らす彼を、軍に残ったドナヒューが訪ねる。いまだに「北の風」の問題に拘泥しているこの現役将校は、ルーズ

---

<sup>41</sup> Там же. С. 305.

ヴェルトの陰謀説、すなわち日本が攻撃するのはソ連であるとのあの「暗号」を利用し、真珠湾の防御を手薄にさせ、敢えて爆撃させることで、議会内の孤立主義勢力を抑え込もうと画策していたのだと主張する。焼却すべきものに何らかの意味を深読みしようとするドナヒューを、ホワイトは「アホらしい」と一蹴する。<sup>42</sup> このとき彼はすでに妄想から解放されている。「ブンナカン」において、失踪事件など端から存在していなかったことを知った捜査官が「終わり良ければ総て良し」と述べたときと同型の心理をここに読み取ることができるだろう。ちなみに、冒頭でクラノフの説を確認したが、ホワイトこそキムのオルター・エゴの一人であり、従って、この反応こそが作者から見て妥当だったのである。「北の風」だからといって狂うな、それはとっくに燃え尽きたのだと。

#### 4. 嘘の効用

ここまで、キムの作品に特徴的な精神分析へのアイロニカルな態度を確認してきた。では、これは何に由来するものなのか。大局的に言えば、当時のソ連社会では精神分析は否定的な扱いを受けていた。しかし、この態度が準備されたそれ固有の歴史を考察しなければ、キムの諸作品の特徴は単なるイデオロギーの問題に過ぎなくなってしまう。

ここでキムの伝記的な事実に再び目を向けることにしよう。彼の作品から読み取れる批判的な見方とは裏腹に、そこには意外にも精神分析的な関心と呼び起こしそうなエピソードが散見されるからだ。具体的には、外傷体験と解離という問題系において注目される出来事である。

すでに確認したように、外傷体験は、例えば類似した状況に遭遇することで、初めて「それ」として遡行的に見出されるのだった。つまり、経験の反復が重要な契機となっているのだが、キムの経歴においても生命に関わる程の危機的な出来事に遭遇することが、間接的・想像的に体験されたものも含めて複数回、類似した構成で繰り返している。

1899年にウラジオストクで生まれた朝鮮系のキムは、少年時代を日本で過ごし、1917年に出生地に戻ってから、一時期ジャーナリズムの世界にも身をおき、その後、モスクワで東洋学者かつ諜報員（内務人民委員部など）として活動することになる。

最初の出来事は彼の記者時代のことである。1920年4月初頭、キムは『ソヴィエト極東勤労民代表者大会』に参加したのだが、その帰路の列車が、当時シベリア出兵中だった日本の憲兵による臨検を受ける。キムは、憲兵らが彼の「持っていた鞆の中に、外国の占

<sup>42</sup> Там же. С. 207-300.

領軍のことを悪く書いた私の手記やポスターなどを見つけ、彼を『不逞鮮人』として逮捕すると宣告」したと回想している。「この宣告は実際においては死刑の宣告を意味するもので」、「事実こうした名目で逮捕された朝鮮人らは何れも、何等の審査も裁判もなく即時に銃殺されたのでした」と。このとき彼を救ったのが、後に『ナウカ』の創始者となる大竹博吉だった。大竹が「これは私の秘書で日本人です。車内に置いといて下さい」と申し出たのだ。その後、彼らは尋問のため移送されたが、「ニコリスクの衛戍司令官が、大竹の知人であった小田切少将であった」ことから事なきをえる。<sup>43</sup>

「不逞鮮人」であるとの有無を言わさぬ理由で「即時に銃殺」されかねなかった経験は、素人目に見ても外傷的と言えるものだ。そしてキムはこの出来事を、その三年後の関東大震災における朝鮮人虐殺において、思い起こすことになる。彼はこの事件について、ボリス・ピリニャークの日本旅行記『日本の太陽の根本』（1927）に東洋学者として寄せた解説で、次のように書いている。

1923年9月1日の夜、大震災後に住家を失った東京の人々は、荒野、公園そして路地に集い、カグツチ[記紀神話における火の神]が燃えさかる街並みを馬車で跋扈する様を見ていた。[...] 彼らの間にいつしか不気味な噂が広まった [...] 朝鮮人が野蛮な群衆となって、[...] 生存者の殲滅を開始すると。古くからの恐怖が群衆を捉えたのだ。

[...] 丸腰の人間が滑稽な片言のために、[...] 虐殺されたのだ。朝鮮人としての私が、呼吸を抑えてこの九月の制裁のことを書くのは困難である。<sup>44</sup>

ここでは記者時代の危機的状況が、同胞の経験を介した想像的なものであるが、追体験されている。「手記やポスター」が「不逞鮮人」の証明であったとすれば、「滑稽な片言」は「野蛮な群衆」としての「朝鮮人」の指標となるのだ。この外面的な指標に基づく他者からの強制的な同一化は、得られた手掛かりから真相を一義的に解き明かす探偵の振舞いに似てはいないだろうか。しかし、仮にこの「滑稽な片言」についての判断そのものを停止させることができれば、別の結果になった可能性もあったはずだ。丁度、大竹が朝鮮系であるキムを「これは[...] 日本人です」と言って救ったように。これらの事例に見られるように、キムの個人的な体験には、別の物語の提示（「日本人」を詐称すること）による危機的状況の打開というテーマが繰り返されるのである。

<sup>43</sup> ロマン・ニコライヴィッチ・キム「大竹博吉同志についての追憶」『大竹博吉：遺稿と追想』大竹会、1961年、257-258頁。

<sup>44</sup> *Ким Р.Н.* Ноги к змее (Глоссы). М., 2014. С. 181-182.



この文脈で興味深いのは、彼の内務人民委員部時代の出来事である。先述のように、1937年、大粛清の中でキムもまた逮捕される。容疑は「日本関係の諜報員のリスト、ОГПУの組織構造、防諜活動の体制と方法、監視対象、また朝鮮関係の工作の内容」の漏洩だった。<sup>45</sup>皮肉なことに、今度は日本のスパイであることを疑われたのだ。しかし、今回はこれまでの経験で学んだ方法、つまり別の物語の提示による状況の打開という主体的な取り組みは功を奏さない。

彼は自分が「モトノ・キング」であると語ったのだった。逮捕時の彼はさらに、日本での学生生活ではこの名前では都合が悪かったので、「サオリ・キング」で通していたとも証言している。<sup>46</sup> これらの供述は高い確率で虚偽であり、その意味で別の物語の提示である。だがこの話が特殊なのは、それが運悪く取調官の期待に沿った形になってしまっていることだ。つまり、実質的には別の物語の提示にはなっていないのである。それはまるで、相手の「知」に自分を合わせるかのような振舞い、「知っていると想定される主体」としての分析家への過剰な歩み寄りのようでもある。自分が何者であるのかを外面的（「手記やポスター」「滑稽な片言」）に確定する言説の判断を停止させ転倒することが、これまでの事例に示された理想だったにも関わらず、ここではそれが逆効果になってしまったのだ。

その証拠に、キムはこれ以降、この供述を語りなおし、撤回しようとしている。逮捕から二年後、彼は「私は自分が日本人である、キムは本当の姓ではないと言われ、本当の日本姓を述べるよう求められました…。日本人などでは決してなかったことを納得してもらおうとしましたが、私の主張は取調べで考慮してもらえませんでした」、「証言の内容は捏造したものです、供述書を早く仕上げることで事件の取調べを終わらせられるかもしれないとの結論に至ったためです」と述べ、その翌年にも日本のスパイなどでは「決してなかった」との主張を繰り返した。<sup>47</sup> 釈放されたのは1945年冬のことだった。

諜報員時代の経験を、彼は「晩年まで [...] 一切口を閉ざして語って」おらず、逮捕に関しては「北アフリカの収容所に長いこと入れられていた」などと言ってはぐらかしている。<sup>48</sup> 彼が自分の過去を直視することに困難を覚えていたことは明らかである。しかし、その代わりに、彼は探偵小説を書いた。しかも、かつての自分自身のような捜査官や諜報員が登場する小説を。

このことの意義を、先に見た彼の作品の特徴との関連において考えてみよう。その作中

<sup>45</sup> Мозохин. Противоборство. С. 338.

<sup>46</sup> Там же. С. 334.

<sup>47</sup> Просветов. «Крестный отец». С. 158-161, 168.

<sup>48</sup> 木村「〈ある作家の肖像〉」324, 327頁。

世界では、「分析家＝探偵」の役割が疑問に付され、解体されるのだった。キムはここで、探偵小説を創作のジャンルとして選択し、そこに内在することで、探偵や分析家に帰属すると想定される「知」を転倒させた。これはある意味で、逮捕時の失敗を取り返す試みと言えるのではないか。あとき彼は、取調官の期待という「知」に結果的に迎合してしまった。これを語り直さねばならない。しかしそれは、探偵（諜報員）が活躍する典型的な物語であってはならない。それでは、過去の失敗をもたらした構造を再び呼び寄せるだけである。それだけでは不十分で、この構造自体を覆さねばならないのだ。それができれば、「分析家＝探偵＝取調官」が体現する「知」に躓くことなど、そもそも起こりえないだろう。

キムの小説は、証拠から推論を組み立てて一義的な解決に至るようにはなっておらず、この構成の反復には恐らく作者の意図が込められている。精神分析を主題にした作品においても、その言説から導かれる判断を真に受ける態度は、頑なに揶揄される。このことから、キムの小説が、彼の外傷的ともいえる経験を、敢えてなぞらないような形で書かれていることは確かなようである。先に検討した諸作品に観察できることが、精神分析に対する単純な否定的感情を越えるものであるとすれば、それは以上のような意味においてである。

## 5. 偶有性

キムの個人的な体験にはもう一つの精神分析的テーマがある。すでに確認したように、彼にはいわば三つの祖国（朝鮮・ロシア・日本）があった。そのため、複数の名前を使い分けていたことが分かっている。キムの同級生だった志賀直三は、彼の名を「金基劉」や「ニコライ・キム」と書いており、<sup>49</sup> 彼が通っていた慶應の学籍簿には「金雙龍」とある。<sup>50</sup> また彼は、当時世話になっていた人物の姓を取って「杉浦キンジ」とも名乗っていた。<sup>51</sup> これらに加えて、「キム・サオリ」、「モトノ・キンゴ」と「サオリ・キンゴ」、そして「ロマン・キム」。

架空の名前・間違われた名前などを含めても、これらは、対他的には個別の人格を指示するものである。従って、それらを担う物理的な個体としての「その男」を生きることが、人格の解離を伴う体験であることが予想される。つまり、ここには「多重人格」の問題を見ることができるのだ。この問題は「ブンナカン」においても憑依現象という形で扱われていたが、検討できていなかった。最後にこの点に目を向けよう。重要なのは、小説では

<sup>49</sup> 志賀直三『阿呆傳』新制社、1958年、25, 28頁。

<sup>50</sup> 木村「〈ある作家の肖像〉」317頁。

<sup>51</sup> Куланов. В тени. С. 320.

結局のところ多重人格がペテンに過ぎなかったことである。つまり、それ自体は深刻な病であるものの、キムにとっては解離のような精神分析の古典的な現象も批判の対象だったのである。

中井久夫は「私の知るすべての多重人格の各『人格』には葛藤がない。健康な人格は葛藤をはらんで変貌する」と述べている。<sup>52</sup> これは個々の人格内に葛藤がないことの不思議さを指摘したものだ。この葛藤のなさを、探偵小説の文脈で言えば、全てが一義的に決まってしまうこと、それ以外の真相が排除されることとして捉えられないだろうか。「モトノ・キング」について考えてみよう。このルビヤンカ内部監獄で日露関係史の資料を参考に練られた「名」は、実のところ、「日本の元外相の息子」といった役割の記述のみに還元され、そこからは逸脱できない、いわば概念なのである。「モトノ・キング」に矛盾することを言ってしまうと、尋問が終わりを迎えることはなかっただろう。それに対し、「ロマン・キム」は忍者にも例えられるような、曖昧な人格を指示する固有名である。固有名と役割の記述の代用との違いは、前者が固定指示子としてその対象をあらゆる可能世界で同一的に指示する、つまり対象の反実仮想を許容するのに対し、後者はそれを排除することにある。<sup>53</sup>

確定記述から構成される役割には、それ以外の可能性がない。つまり「葛藤がない」。それに対し、固有名は命題の訂正可能性に開かれており「変貌する」。この理解に立てば、解離の問題へのキムの批判的な視座も、これまでの議論を例証するものだったことが分かるだろう。つまり彼は、一貫して「他でもありえた」という様相への関心を抱き続け、それが作品においては「知」を想定される「分析家＝探偵」の批判的扱いとして現れていたわけだ。

これには、一義的な同定に抗うという、実体験に裏打ちされた作者の意志があったのかもしれない。そう考えるなら、作家としてのキムは、別の物語を提示するという行為においても、また一義的な解決に至らないという内容においても、可能・非必然から定義される偶有性の問題を扱っていたのだと言える。彼の作品では、そもそも謎などないか、あったとしても手掛かりなしの状態で、探偵が推理を試みる。しかし、それは根拠を欠いた臆断に過ぎず、もう一度調査をしたなら、別の結論になってしまうような性質のものである（例えば、今度は「西の風」に振り回されるかもしれない）。この意味で、小説を書くということ自体が、キムにおいては作中人物の模倣となっている。彼が繰り返したのは、解決に

<sup>52</sup> 中井久夫「多重人格をめぐる」『家族の深淵』みすず書房、1995年、222頁。

<sup>53</sup> ソール・クリプキ（八木沢敬・野家啓一訳）『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』産業図書、1985年。

至らない物語の変奏だったのだから。このことに、一義性に抗うということ以外の積極的な含意を読み取ろうとするなら、それは妄想を適度に楽しめ、そして深入りし過ぎる前に「焼却」せよとのメッセージなのかもしれない。

## R. N. Kim and the Issue of Subjectivity: Detective Fiction, Psychoanalysis, and Contingency

SAKANAKA Norio

R. N. Kim was a pioneer of Soviet detective fiction. However, one cannot ascertain that his works have been researched sufficiently so far. The purpose of this paper is to clarify his understanding about this genre by examining the structural characteristics of his works.

The plotline of Kim's works is peculiar in the following way: something mysterious concerning the crime happens and detectives start its investigation, but they end up without obtaining a result. What seemed to be a mystery is, in fact, just an illusion or a character's misunderstanding. This plotline repeats itself throughout Kim's works. In other words, his works are, so to speak, variations on the "overturning of the riddle structure."

Incidentally, Freudian theory is frequently discussed and cynically criticized in Kim's works. We can draw an analogy here between the Freudian theoretical structure in which the death drive develops into the super-ego as conscience or culture and renders the aggressiveness harmless by itself, and that of detective story in general. For the latter has a self-referential circle which begins with the victim's existence (result of aggression) and ends with the arrest by the state power monopolizing the legitimate use of physical force (aggression is sent back to where it came from), after the nomination of the criminal by the detective. Kim himself seemed to be aware of this analogy.

Kim took a negative attitude toward detective fiction and psychoanalysis. What was his true intention? In his works, the univocal solution of the case based on the observable facts is denied by the existence of another truth, which lies beyond the detective's imagination. In other words, the objective and compulsory identification by others (detectives or psychoanalysts) is overturned by the author himself. This shows his continued, perhaps unconscious, concern for the counterfactual situation that was unnecessary, but possible, namely contingency ("it might have been different"). It is possible to read here his humble attempt to deviate from the state of subjection to the authoritative voice. This paper will discuss these issues in connection with Kim's personal history.